

「標準放射線医学」第4版

千葉大学教授・放射線医学 有水 昇 編集
金沢大学教授・放射線医学 高島 力

神戸大学教授・放射線医学

河野 通雄

放射線医学は現代医学の全領域に必須の学問であり、これを1冊の書にまとめることは極めて困難であるが、1982年に有水・高島両教授の編集でうまくまとめられたのが本書の初版である。学生達もバイブル的に所持し、ポリクリでは、「この本にはこのように記載してあります」と指摘されたりしたものである。

その第1版の序文では“国家試験に合格して研修医に至るまで手離せない教科書”を基本方針の第1に挙げている。第4版にもこの方針が貫かれており、研修医はもちろん、実地医家や放射線科専門医でも知識のrefreshや整理のためにも役立つよう編集されている。すなわち、本書の内容が陳腐化することなく放射線医学の最近の進歩に追従するよう、第一線の専門家によって執筆されているが、最新情報を網羅するために執筆者の入れ換えをするなどの思い切った配慮がなされている。

本書の内容は診断総論、診断各

論、放射線治療、防護と管理に大別されるが、いずれの項も通し番号でまとめられているのは学習を容易にするための配慮であろう。

放射線総論のうち、digital radiographyやMRIについてかなり詳細に記述しており、各論でみる画像や臨床の場での画像診断に役立つ。

診断各論は、国家試験のガイドラインに沿って編集がなされているが、各項目ともconventional x-ray所見を軽視することなく、CT、MRI、核医学検査等の最新情報も記述されている。核医学を診断の一項目としているので、むしろ診断学の中の位置付けの理解に役立つ。また放射線医学の中で重要な位置を占めつつあるinterventional radiologyにもかなりの頁が割かれているが、冠状動脈拡張術なども含め、もう少し内容を増やしてもよいと考えられる。

放射治療学については、放射線腫瘍学という概念が定着しつつあるが、学生諸君にとってはやや理解し

にくい面もあり、放射線治療学の名が用いられたと思われる。悪性腫瘍には放射線療法を軸とした集学的療法が行われており、放射線療法に加えて併用療法の意義についても若干記述されているが、化学療法についてももう少し記述があってもよいのではないかと思われた。

放射線障害・防護・管理の項に超音波・磁気等の安全性について書かれているが、まさに的を射た企画である。ともあれ、参考図書、索引を含み944頁というのはいささかhandyとはいえないが、わが国では文字通り最も標準的な放射線医学教科書であり、これを完成させるために御苦労された執筆者ならびに編集者に対し敬意を表すると共に、学生諸君はもとより、放射線科研修医や一般医師にもぜひ推薦したい格好の参考書である。

● B5 944頁 図509 写真1508
原色図1 1992 定価10,300円
(税込) 7400円

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)